

NHK への質問状の添付資料（感想文）から NHK「坂の上の雲」を考える宮城県有志の会

感想文 A

NHK ドラマ「坂の上の雲」第一部について

（男性：80歳）

現代の道徳観から歴史を振り返る

テレビドラマ「坂の上の雲」を見るにあたって、まず抑えておきたいことは、日清・日露の戦いは、決して秋山兄弟のような職業軍人たちだけによって推進されたのではない、一部の目覚めた人たちを除いて、日本中の明治人たちの熱狂的な後押しで進められたのだということである。かと言って私は、アジア太平洋戦争敗戦直後の東久邇首相のように一億総懺悔と言って戦争責任を国民全体に押し付け、責任論を曖昧にしようとするのではない。是非この拙文を最後まで落ち着いて読んでいただきたい。

確かにここに登場する3人の主人公は士族の出身であり、松山藩は幕軍についた上、明治9年の秩禄処分によって収入の道を断たれ、貧窮のどん底に叩き込まれた。その結果、秋山兄弟は貧乏人の出世の道として職業軍人の道を選んだ。職業軍人とはどのように弁解しても人を殺すことを本業とし、暴力で解決しようとする職業である。しかし彼らは職業軍人以外の子規のような道を選ぶことができたわけで、司馬遼太郎に言わせれば2人とも職業軍人以外の道で大成できる資質を十分持っていたはずである。明治維新がフランス革命のような市民ではなく、武士階級によってなされて、伊藤らの明治政府が、軍人によって国を固める道を選び、軍人養成に巨額を投じた。その国策に疑いもなく乗ったのが秋山兄弟であり、このドラマの主要人物達である。この点で司馬が秋山兄弟や主要軍人達を肯定的に描いていることに注意せねばならない。

確かに軍人を否定的にみるのは我々が敗戦を経験してからであって、それが当たり前だと思っていた明治時代に当てはめるのは間違いだという意見も存在し得る。しかし「坂の上の雲」は歴史小説とみなされているようだから「歴史をどう見るか」、をここできちんと押さえておきたい。昔にはその時なりの必然的な流れがあって、当時の常識を現代の尺度で推し量るべきではない、という、ランケ的見方がある。それに対して、600年も前のキリスト教徒の行動は誤りであったと反省するローマ法王ヨハネス12世のような歴史観がある。

確かに歴史的過去の事実を断罪しても、それ以後の歴史を「物理的に」変えることができない。だから歴史学にIFを持ち込むべきではないとも言われる。しかし過去の歴史を現在の目（具体的に言えば日本の公共放送である限り現在の平和憲法の基準）で正邪の判断を下すことが「歴史を学ぶ」意義である。NHKドラマが明治の軍人を肯定的に描いていることにまず我々はもっと敏感でなくてはならない。

明治の庶民の戦争観

では軍人以外の明治庶民はどうであったか。日清戦争では国家予算の何と1/3を戦争に投じた。超大国とみられていた清国に、辛うじて勝利した結果、伊藤らは日本円に換算して二億円という、清国が2度と立ち上がれないほどの賠償金を吹っかけてぎりぎり絞取った。戦勝国といえども戦敗国が立ち直れぬほどの賠償金をとるべきでないというのが国際的な常識となるのは、それよりも半世紀も後のことである。

明治庶民はそのために戦争すればもうかるという誤った教訓を得てしまった。ところが明治政府は清国から戻り取ったその賠償金のほとんどを次の戦争のための軍備に投じた。政府は更に日露戦争においてはなんと国家予算の半分を戦費に投じた。現在の日本の国防費がGDPの1%程度であることを考えると、48%というのがどれほど明治庶民の膏血を絞取ったものであるかは想像に余りある。

明治生まれの私の母は、金銭感覚に乏しかったのに後生楽であったが、その母ですら、日露戦争のために庶民の生活は窮乏を極めた、と述懐したのだからその苛斂誅求ぶりは凄まじかったのであろう。明治庶民はそれでも日露戦争を熱狂的に支持した。

福沢諭吉は巨額の私費を軍に寄付した上で、国民にも熱狂的に献金を呼びかけた。国民もこの戦いに勝ちさえすれば、清国よりも超大国であるロシアからはもっと莫大な賠償金が取れると見込んで酔ったように戦争の後押しをした。司馬遼太郎はこのような戦争＝暴力を支持した明治人を、国民のあるべき姿として賛美しているのである。

思うほどの賠償金が取れずに帰国した小村寿太郎に対して日比谷の焼打ち事件を起こしたのは、戦争を支持した大衆の狂気の裏返しである。明治人には、日清も日露も勝ったのは全くの偶然であったという事実は教えられず、勝利にただただ酔いしれてしまった。

それが以後の軍部の暴走と日本の敗戦へとつながっていくのであるが、この明治人に対する分析はドラマでは余りなされず、逆に明るい、国民としてあるべき姿の明治人として肯定的に描いている。活字を読まなくなった現代の若者からが、ドラマを見てこのような意味での「明るい平成人」になったとしたら、NHKは喜ぶだろう。

教育の大切さ、知らないうちに刷り込まれている怖さを自ら経験してきただけに、よほど批判的にこのドラマを見るべきだと思うのである。日清・日露戦の間、清国・ロシアをやっつけろという明治庶民の無邪気な熱気は、軍人たちをいやがうえにも後ろから押したてて政府に貢献した。翻ってこのドラマを見る素直な視聴者たちが、自分で気がつかないうちに国粋・軍国主義の刷り込みにひっかかってしまったら・・・。

現在に直結する問題として、明るく描かれている明治庶民には、余り描かれていない危険な熱気があったことが、すごく気になってしまうゆえんである。

なぜ子規を取り上げたか

司馬遼太郎はなぜ秋山兄弟だけでなく子規を入れた3人を主人公にしたのか？前に述べた秋山軍人兄弟のカモフラージュに使ったのだと見る。子規は与謝野晶子と違って戦争＝暴力に対して極めて鈍感なノンポリである。（晶子もアジア・太平洋戦争では軍国歌人となるが。）

ドラマの第2回で子規は自由民権運動に加担し、何度も演説を行っているが、現在その演説草稿は残っていない。当時自由民権運動は日本全国の青年たちを熱病のように襲い、特に四国・高知は自由民権で沸き立っていたから、松山の若者がこの運動に加わらないというほうがおかしい。しかも子規は将来政治家になることを志して上京した。しかしそれはあくまでも流行に乗っただけで、心底から社会科学に関心を持っていただけとは到底思えない。

政治家たらんとする人間は散文体で論理的に自分の主張を訴えなければならぬ。啄木は子規よりも目覚めた詩人ではあったが、本格的な社会主義的主張は散文でなされている。俳句や詩の文体では政治理念の伝達は無理なのである。（蒲原有明と北原白秋は、正岡子規は詩人ではないと断言したが、今日子規が俳人の資質があったことに異議を挟むものはいない。）

オッペケペーの壮士芝居は歌詞の形で政治主張をしているが、川上音二郎達が感覚的にはともかく、きちんと論理的に主張を伝達したとは思われない。俳人を志した子規は、しよせん政治家ではありえなかったのである。彼は小説も書いてはいるが、軍国主義や政府批判はおろか、およそ社会科学関係領域には、一歩も足を踏み入れていない。晩年には無定見にも陸羯南という右翼ジャーナリストに従っている。

ドラマの第5回で、子規は日清戦争従軍許可に飛び上がって喜んだ。このとき子規は本心から雀躍したのであって、その点では実に素直な福沢の扇動の追従者であり、戦争を熱狂的に肯定・支持した平均的明治人である。

司馬遼太郎がもしNHKが主張するような本物の非戦論者であったとするならば、こんなノンポリ子規でなく、同じ愛媛の同時代人である水野広徳を描くべきだったろう。水野は同じ松山中学を秋山兄弟や子規の後輩として卒業して海軍の職業軍人となり、日本海海戦にも参加し、海戦を肯定的に描いた「此一戦」という大ベストセラーで一世を風靡した。しかし第1次大戦で戦争の悲惨さと誤りに目覚め、その後は日米戦うべからずの強力な論陣を張って、おかげでアジア・太平洋戦争中は特高にしつこく命を狙われた。大艦巨砲主義が海軍の常識であった時代から、来るべき東京大空襲を予言し、反戦を貫いた武人である。実に小説的であり、秋山兄弟の人物像を浮き彫りにするのに最適な明治人ではないか。

秋山兄弟の宣伝文句

ドラマの宣伝文句として秋山好古は、コサック騎兵隊を蹴散らし、真之は日本海海戦を勝利に導いた名参謀だとたたえている。しかし原作にもコサック騎兵隊を蹴散

らしたという記述はないし、真之に名参謀の事実があり、それを実証的に記述したら、司馬が讃えていた東郷の面目は丸つぶれになるだろう。だから原作では日本海海戦で唐突に小説を終わらざるを得なかったともいえる。いずれにせよ原作でもドラマでも、秋山兄弟についての宣伝文句は誤りであることを認めるべきである。特に3人の主役の中でも一番主役になっていく真之に本物の参謀としての洞察力がなかったことについては後でも述べることにする。

絵画的で美しい軍服の意味

ドラマを見て、日本軍の軍服がカラフルで事実と反するのではないかというまことに女性的な疑問が出された。しかしドラマでは残念ながらこの服装考証はきちんとなされている。源平の合戦でもナポレオン戦争でも、19世紀までの武士や軍人たちは極めて絵画的で美しい軍服を着て戦った。美しい軍服を着ることは庶民の夢だったからこそ「赤と黒」の作品が生まれた。殺人という犯罪を庶民に押し付けるための装置として、最高に絵画的で美しい軍服が考案・用意されてきた。

現在アメリカの大人の大人たちが南北戦争のおさらいをして毎年「戦争ごっこ」に熱中しているのも、美しい軍服が一役も二役も買っている。日清戦争で好古たちが着用した黄色い帽子と金モールに真っ赤なズボンにまるでマネーが描いた鼓笛隊少年の名画を見ているようで実にテレビ的にも美しくカッコイイ。事実日清日露戦の錦絵は、歌舞伎の舞台絵と並べて、美術品としても飛ぶように売れた。

日頃食うや食わず、着のみ着のままの明治の若者達は、この軍服への憧れもあって、嬉々として戦地に殺人に赴いたのではなからうか。しかし派手な軍服は敵の標的になりやすいから、私の少年時代の日中戦争ころになると、軍服は土色（カーキ色）になるがそれでも美しくかっこいい。「僕は軍人大好きよ/今に大きくなったなら/勲章付けて剣下げて/お馬に乗ってハイドウドウ」大人が子供に押し付けた童謡を素直に歌い、美しい軍服に素直に憧れながら軍国少年は育っていった……。

その後の軍服は更に非絵画的な方向に突き進む。いまや全世界の軍服が塵芥に似せた迷彩服になった。死体に似せて顔には泥を塗るようになった。災害現場に派遣される自衛隊員も、この汚いカモフラージュ服を着ている。その画面に視聴者は掌を合わせる。災害になるとこの迷彩服の人達が助けに来てくださる。“だから”自衛隊は必要だ。冗談じゃない。日頃本業として殺人の訓練ばかりしている自衛隊員に、殺人の片手間として救助なんかしてもらいたくない。

だいたい災害現場のあのカモフラージュ服は、だれに対してカモフラージュしているのだ。国民の目を誤魔化す為じゃないか。救助されるなら同じ災害現場で活躍している救助隊員のように、救助に効果のある明るいオレンジ色の服を着て、まじめに救助訓練に専心している精鋭に助けをもらいたいものだ。

汚い迷彩服にごまかされている視聴者は、ドラマのき

れいな軍服にはいとも簡単にごまかされる。画面ではカラフルな軍服を着た明治人によって人間が殺されているのだ。百万に及ぶであろう殺された本人や遺族たちの悲しみは伝わることなしに……。

ドラマ肯定派の根拠

司馬はこの小説のテレビ化に最後まで反対した。それに対してNHKドラマの肯定派の根拠はおよそ次の通りである。

NHK 審議会・監督・脚本家の性格

NHK側は主張する。ドラマ化の結論に至るまで、審議会は何年もかけて慎重な審議を重ねてきた。監督・脚本家は名にし負う反戦の筋金入りの連中である。彼らのやることだから間違いはない。しかし問題はその結果だ。素人の私が素直に感じただけで、ここに纏々述べただけの欠点がある。

遺族たちの同意

当事者の司馬はすでにいないが、そのかわりNHKは遺族をはじめ司馬記念館長ら関係者に足しげく通った拳句、すべて同意を得ているから大丈夫だ、と言っている。

しかし司馬と遺族は、どんなに親しい間柄でもあくまでも別の人格だ。私の国民学校での担当の先生は治安維持法で投獄された。一緒に投獄されて戦後生活綴り方教育に献身された90歳の老先生を訪ねた時、対応に出た長男の小学校の先生は、バリバリ右翼の教頭先生だった。遺族は違う考えを持っていて当然。司馬夫人は遼太郎本人ではない。

映像化技術の進歩

司馬がテレビ化を拒絶した時代と追って、映像化技術が格段と進歩した。だから戦争場面も許される？「進歩したから」危険なのじゃないか。嵐寛十郎主演の「明治天皇と日露戦争」は大ヒットして多くの日本人の心を揺さぶった。私は意識して最後までこの映画を見ることを拒否したので、これについて論評する資格はない。

しかし3年前の美しくCG化された日本海海戦のNHKドラマを見よ。今回のドラマ化であれよりも美しい日本海海戦の映像が全国のお茶の間に放映されたら、さらなる危険が予想される。

加藤剛・日本の青空と伊藤博文

このドラマで伊藤博文を演じているのは「日本の青空」で主役を演じている加藤剛である。しかし加藤本人はNHKが宣伝している「伊藤博文は平和主義者」といううたい文句をそのまま喜んで信じている。残念である。

また好古役の阿部寛をはじめカッコイイ有名俳優・女優たちが綺羅星のように出演しているが、それぞれこのドラマがどのように誤ったメッセージを発しているかの反省なしに皆NHKの意図に嬉々として乗っているのは残念である。

秋山真之とメイン号事件、ルーズベルトとブッシュの議会操作

原作でもこのドラマでも、秋山真之は日露戦争でなく

てはならない名参謀であったと宣伝されている。米西戦争からヒントを得て旅順港閉塞作戦を立案した輝かしい功労者だということである。しかも閉塞の失敗は有馬に押しつけ、成功面は真之にあるとしている。はたしてそうであろうか。ヒントのもとになったサンチアゴ港の閉塞は失敗しているし、それを真似した旅順港閉塞も、全く同じ原因で失敗している。世界史の大きな流れの中できちんと史実と比べてみよう。

秋山兄弟が生まれたころアメリカ政府は先住民であるインディアンを虐殺しながら大陸を西進し、太平洋岸に達してフロンティアが消滅した。すると、もう大陸内に征服するところがなくなって、ご都合主義にもそれまでのモンロー主義を簡単に破棄して矛先を海外に向けた。そこでカリブ海に浮かぶスペイン領有のキューバに目を付けた。ハバナ港にはアメリカ海軍が誇る戦艦メイン号が停泊していた。

当時アメリカでは派手なイラストやスキャンダルなどで華々しく紙面を飾る、いわゆるイエロージャーナリズムと呼ばれたハーストとピューリッツァーという2大新聞が発行部数を賭けて鎬を削ってニュースを追いかけていた。1898年のある日、ハースト紙の社主は社員である記者にハバナ港への出張取材を命じた。ハバナ港に到着した記者は社主に電報を打った。「当地はなにも事件がなく平和そのもの、帰ってよいか」社主は返電した。「事件はこれから当方で作る。貴下はただそれを取材して報告するだけでよい。」

事件は起きた。メイン号で原因不明の爆発事故が発生し、226人が死亡した。ハースト紙は直ちに爆発はスペイン軍の仕業だとして大々的に書き立てた。マッキンレー大統領は米国議会で吠えた。メイン号を忘れるな！スペインをやっつけろ！議会はたちどころに呼応した。REMEMBER THE MAIN! このときアメリカはこのようなスローガンを叫べば目の前の内紛を全部忘れて、たちどころに外敵に向かって一致団結することを学んだ。

この米西戦争の結果、アメリカはフィリピンやグアム島を植民地として獲得した。日本ののど元に米国の匕首が突き付けられた。

そこで43年後に同じ議会でルーズベルトは同じように叫んだ。REMEMBER THE PEARL HARBOUR! この叫び声が余りにも効果的だったため、日本海軍は当初予定していた「半年で太平洋戦争を辞めて和平へ」という計画を断念せざるを得ず、日本を惨憺たる敗北に導いた。それからちょうど半世紀後、すっかり味をしめたブッシュ大統領は同じような言葉を繰り返した。REMEMBER 9.11! 全く同じように議会在一致団結した反応を即座に示したのを見て、ブッシュはにやりと下品な笑いを浮かべた。

この元になっているメイン号の爆破が、アメリカの自作自演であることは、現在歴史の定説になっている。その米西戦争の現場に、秋山真之はただ一人の観戦武官として日本政府から派遣された。彼は外国武官が引き揚げたのちも丹念に破壊された軍艦の調査を行って精密な調査報告書を日本に送った。司馬は真之の調査が精密で

極めていたことを絶賛したが、肝心のメイン号の爆破を当のアメリカが行ったことを見破ることができなかったことについては全く目をつぶっている。

また真之が読んだはずの新聞1面トップの大きな見出し文句と同じようなスローガンによって、日本が半世紀後に壊滅的な敗戦を迎えることを洞察することができなかった。彼がリアルタイムで読んだ新聞の第一面に踊る見出し文字から、半世紀後の日本を洞察できなかったのはまあ仕方ないでしょう。

しかしメイン号の爆破が、アメリカによる自作自演の犯罪であることを見破れなかったのはいかがなものか。しかもドラマで真之がマハン邸を訪れた時にも、彼はマハンから「今アメリカが欲しがっているのはきっかけだよ。それさえあれば我が国はスペインに宣戦布告することができる。」という極めて思わせぶりの暗示まで受けている。これまでしてハースト紙を読んだ時すぐピンとこなかったら、名参謀どころか愚鈍としか言いようがない。

明治庶民がおさめた多額の税金を使って、たった一人米国に派遣された責任者である。幸運にも派遣された先で、リアルタイムで戦争が起こされた。日本人として現湯に一番近いところで、犯罪が発生したのである。しかも現場をしっかり調査することが政府から課せられた真之の本務である。事実彼は他のだれよりも時間を費やして艦船の破壊状況を調査した。それなのに破壊がアメリカ自身によるものであることを見破れなかった。節穴の目をしていたとしか言いようがない。その彼を名参謀と持ち上げた司馬の目も、歴史家として節穴というべきである。

小説の一番大事な宣伝文句が偽りである以上、この小説や、それを取り上げるNHKドラマは駄作であるとしが言いようがない。

逆さの地図

尖閣列島問題で日本政府は、「国際法上列島が日本の領土であることに一点の曇りもない。従って国内法にのっとり、粛々と事を進めている。」の一点張りである。同じ列島が「国際法上中国の領土であることに疑いはない。」という相手側の主張には完全に耳をふさいでいる。どちらが正しいのかを言う前に、まず異なる意見が両立している、という客観的事実を認めなければ、外交の歯車は噛み合わない。

意見の違いをまず認めた上で、次にどちらが正しいのかを論理的に導かなければ、両者の解決はない。同じことは日韓の教科書問題にも日露戦争の解釈にも言える。相手に屈服したことになるとか相手の見方が正しいか否かとは全く別の問題なのだ。

地球儀を米大陸を手前にして上(北)から見下ろしてみよう。普段我々は北を上にした世界地図ばかり見ているが、このようにみおろすと、北が手前(下)、南が先方(上)、つまり普段見る世界地図を逆さにしたような世界観が得られるだろう。そのうえで自分がロシア人になったつもりでロシアの国土を眺めてみよう。少なくとも私は閉

所恐怖症になってしまう。広い国土が雪と氷に閉じ込められたまま、広い海に出られないのだ。バルト海にしても黒海にしても日本海にしても、単なる水たまりであって、そこから広い海にでる道のりは遠いのである。いくら広い国土を持っていても息苦しくて、スカンジナビアに嫌われても大西洋で手足を伸ばしたいし、トルコと戦ってでも地中海に出たいし、アフガニスタンを通してインド洋の空気を吸いたい。歯舞シコタンが、たまらなく貴重に見えるし、朝鮮半島を通して少しでも太平洋の空気を吸いたいのだ。だから北方領土や朝鮮半島を奪っていいという論理とは全く別で、口を塞がれて息絶え絶えの病人としてロシアを捉えなければ、広大なシベリアに比べると実にちっぽけな遼東半島や朝鮮に進出しようとするロシアの病的な執念は理解できない。繰り返すが、だからロシアの領土的野心が正しいなどは決して言っていないのだ。

山室真一の著書を読むと、日露戦争直前のシベリア鉄道建設の話が沢山のページ数を使って書かれている。司馬の原作でもこの建設進捗状況が繰り返し書かれている。当時のロシア政府に取って、この建設は焦眉の急であったことが分かるが、それも太平洋の匂いを嗅ぎたいという閉所恐怖症的焦燥感を思えば、病理として納得できる。

私の先輩で、幼いときに母親が松井須磨子のシベリアの舞台歌をしばしば口ずさんでいたのでオーロラ学者になったという有名な研究者がいる。確かにあの時代には芸術座が大はやりで、舞台がはねると、感激した客たちがみんなさっき聞いたばかりの舞台歌を唄いながらぞろぞろ出てきて、歌はそのまま瞬く間に町中から日本中に広まったという。

ロシアは北国はてしない/西は夕焼け東は夜明け……。カチューシャ可愛いや/別れの辛さ……。ひと昔まえの日本人はこの歌を口ずさみながら、遠いシベリアや、果てしない雪の原野を脳裏に描いたことだろう。ロシアへの関心を示すこれらの歌の爆発的流行には、日露戦争後の熱い熱い余韻が感じられる。

東学党蜂起の影響

日韓の歴史教科書を比較すると、その温度差に愕然とする。明治人の朝鮮蔑視が、戦後もそのまま後を引いているように思われる。明治人の朝鮮蔑視はどこから来たのか。江戸末期の武士人口は、全体の10%も占めていた。太平の世が続き、本務の殺人の必要がなくなって無為徒食している癖に威張ってばかりいる大勢の武士階級を、江戸庶民は養っていたわけである。彼らにとっては弱い他藩があればそこを攻め、力づくで勝ったら敗者の土地財産住民の生命を奪ってわがものにするのは昔からやってきた道德観だった。

ところが維新になるとこれだけ大勢の無為徒食公務員に禄を払ってはいは国家経済として成り立たないから武士への支払いを停止(秩禄処分)した。失職した彼らははけ口をどこかに求めねばならなかった。はじめは禄を取り上げた明治政府に反乱したが、佐賀の乱・萩の乱・

新風連の乱・秋月の乱で次々に平定されてしまい、最後に西南の役で決定的に敗れて政府への反乱は断念した。

そこで矛先は朝鮮半島に集中していくわけだが、この征韓論が士族のタカ派だけでなく、自由民権派などの層にまで広まっていたという事実に驚く。現在から昔の歴史を振り返るといって歴史教育がなされていないから、戦国時代のような暴力による解決は当然と思ってしまうのだろう。これは明治以後も後を引いていて、少国民の私も肩怒らせた壮士は目撃しており、弱肉強食も当然と刷り込みをされていた。

維新というどさくさにまぎれて火事場泥棒さながらに古い道徳感を引きずり出し、維新後も肩怒らせてなんば歩きし、特権階級のように暴力的にのし歩いていた連中は、壮士という特殊な種族を生みだした。彼らは朝鮮や中国に渡って大陸浪人と呼ばれ、東学党虐殺事件や閔妃暗殺事件でも傍若無人に活躍し、逮捕後も傲然と構え、法廷でも特権意識を振り回して無罪を勝ち取る。

彼らは 21 世紀の現在でも街宣車の中に生き残っている。再度言うが、閔妃殺人事件のような明々白々たる明治政府の犯罪を曖昧に描いた NHK の姿勢を問いたい。

坂の上の雲に関連しては日本が朝鮮に手を広げたころ、朝鮮では農民・知識階級を中心とする東学党の反乱がおこった。初めは朝鮮政府の圧政に対する反抗だったが、日本軍の横やりが入るに及んで矛先は日本に及んだ。

伊藤らの日本政府はそれに対して無条件で皆殺しにせよとの命令を下した。ここいら辺の明治政府の姿勢は、原作でも NHK ドラマでもきれいに省かれており、あくまでも平和主義者として伊藤を描いている。

私邸に押し掛けて居候する士族

このドラマや特に原作を読んで感心するのは、登場する士族たちが、ただ同郷の先輩であるという理由だけで、勤務先ではなく簡単に私邸に押し掛け、居候や食客になってしまう点である。司馬も、登場人物(ほとんどすべて士族)の描写に、しつこいほどその出自、家系を説明している。明治政府が藩閥政治であったのも頷ける。

もし平民が上京しても、とても私邸に押し掛けたり居候になったりすることはできなかつたろう。明治は青雲の志を持って努力すれば、だれでも出世できる時代であった、と司馬は語るが、士族ばかりを描いた彼は明治の東北の農村の、特に女性の生活がどれほど悲惨なものであったかに、思いを馳せたことがあったのだろうか？

「朝鮮は独立国」のまやかし

日清戦争の講和条約において、その第一条冒頭に、伊藤博文はわざわざ「朝鮮は独立国である」とうたっている。彼の信条とは 180 度異なる文言をなぜ冒頭に掲げたのか。この言葉は清国に向かって突き付けたものであり、「朝鮮は属国である」というのがのちに初代朝鮮総督府長官になる彼の本音である。清国が朝鮮に口出しできぬようにするための、全くの誤魔化し言葉である。

明成皇后の取り扱い

小説やドラマにでてくる明治の人物たちが、当時坂の上に浮かぶ雲をどのように見つめていたかを記述するときに、この明成皇后暗殺事件は極めて重大な事件である。何しろ日本という国が、国を代表する公使をして、「独立国」である隣国の宮廷内に強盗のように押し寄せ、皇后たちを虫けらのように惨殺させてしまった。

この顛末を日本政府の要人はみんな知っていたのに、誰一人として責任者を出さず、全員無罪放免にしたという歴史上ありうべからざる明々白々の大事件だからである。もちろん「歴史小説家」司馬も、NHK も知らぬはずはない。ところが原作やドラマでのこの事件の描き方はどうか。

まず NHK のスペシャルドラマガイド第 1 部を見てみよう。その 155 ページに掲げられている年表には、はっきりと閔妃事件という 4 文字が記載されている。

こんな大事件だから記載しないわけにはいかない。しかしたったこの 4 文字だけでは、閔妃が何者でどれだけ重要な人物なのか、暗殺事件なのか遊んだ事件なのか、さらに閔妃が事件の中で加害者なのか被害者なのかさえさっぱりわからない。その意味では記載がないのと同じである。

明治政府と同じく、NHK の意図的な誤魔化しである。三浦公使と NHK の共犯的殺人である。

同じ年表の、原作に関連した好古・真之・子規の欄には、此の事件に関する反応は一切描かれていない。従って司馬遼太郎も NHK と共に殺人の共犯である。

では年表ではなくドラマの筋のほうを見てみよう。次の通りである。「このころ朝鮮で大事件が起きた……。」まるで自然に発生した関東大震災みたいな書きぶりである。しかもこの事件で国王がロシア公使館に逃げ込んだから日露戦争を起こさざるをえなかつたような筆法で続く。日本政府は多数の事件関係者に詳細な報告をさせたから、政府要人は事件の真相をすべて知っていた。それなのに政府は関係者全員を無罪放免にした。この事実は原作で一切触れられていない。このような史実はすでに昭和 49 年には有名な歴史書ですべて明らかにされており、理系でど素人の私ですら良く知っていた。だから、司馬も NHK も読んでいなかつたとは言わせない。「坂の上の雲」が犯罪的作品であることは、この一事をもつて十分明らかである。

乃木・東郷と福沢

原作でもドラマでも乃木が愚将だと貶める一方、東郷を明治の星のごとく評価している。確かに北欧ではトーゴーはビールのブランドネームになっているくらい評価が高いし有名で、戦後の日本史教科書でもっと個人名を教えるべきだという議論がなされたとき、某勢力から真っ先に名前が挙がったのが東郷だった。

ではその実像はどうなのか。日本海海戦で明治人は彼を神様に祭り上げた。彼も自分は神だと思いがつた。思い上がった証拠に、彼が生存中に東郷神社ができてその祭神になった時、自分が神ではないということ必死

で主張したということをかかない。

彼はその後の欧米との軍拡競争でも、日本の軍拡が手ぬるいと海軍を叱り飛ばした。ロンドン会議に限界を感じたはずだが、国際会議を無視し、国家予算を無視して血税を軍備に注ぎ込ませ、戦艦大和武蔵の秘密建造に狂奔した。日本海海戦のように一列縦隊で近づいた敵味方がまず砲撃戦から開始するという中世的な戦いを想定して、途方もなくでかい大砲を9門も積んだ大艦を作らせ、結局空に向かって打っただけで、大艦と共に2千人の前途有為の将兵を海底に沈めてしまった。その責任だけでも万死に値する。その東郷を司馬はなぜ評価するのか。

明治人の思想を描くときに、明治を代表した思想家の福沢の取り扱いがけしからぬ。司馬の原文では「今の世間では福沢諭吉というひとがいちばんえらい」と好古は著書をいくつかあげていった」程度に記しているが、ドラマでは一歩踏み込んで「学問のすすめ」に強く共感したことになっている。青雲の志を持った明治の若者はほとんどすべてこの本に刺激を受けたはずだから、NHK 創作ドラマなら話の流れとしてもっともであり、この本の発行が有名な「脱亜論」を正式に発表する13年前という解釈に立っているのかもしれない。

しかし福沢はこの本の初編で「支那人のごとく……自国の力も計らずして妄りに外国人を追い払わんとし、かえってその夷てきにくるしめらるるの始末は、実に国の分限を知らず。」とすでに脱亜論を述べていることはよく知られており、この脱亜論イデオロギーは慶応元年の「唐人往来」の「唐土（中国）などこの道理を知らず」に遡れると考えた方が自然だと思われる。朝鮮半島で日清戦争が戦われた時、諭吉の朝鮮蔑視論になぜ筆を伏せたのか。司馬が明るい明治人と結論したいとき、蔑視論がなかったことにしないと結論できないからか？

東条英機現る！

この文章を書いているうちに、そろそろNHKドラマも第2部が始まろうとする時期にきてしまった。NHKの姿勢を正確に知ろうと思って、NHK スペシャルドラマ・ガイド第2部を買って驚いた。とうとう東条英機まで現れたのである。その112ページの脚注からそのまま引用しよう。「海軍大学校は明治21年開校。初代校長は井上良馨。真之と同時期の教官には、のちに東条英機に並ぶ戦史研究家と称された佐藤鉄太郎などがいる。」どう読んでも東条が最高の戦史研究家だという位置づけである。日本をこれだけ惨めな敗戦に叩きこんだ者を私たちは最高の研究者と唱えるわけにはいかない。

メイン号爆破を米軍の自作自演と見破れなかった真之を、名参謀というわけにはいかないのと同じ理屈である。NHKもとうとう馬脚を現した！第2部である東条が脚注に現れたのだから、第3部が終わるころにはNHKは、アジア・太平洋戦争の責任者たちをみんな免責してしまいたいに違いない。それこそがNHKが意図する本音であろう。NHKが出版したドラマガイドである以上、ドラマ制作者にガイドには責任がないとは言わせない。私

たちはこのささやかだが肯定的な東条の出現を決して見逃してはならない。

このドラマと修身教科書

私は昭和5年生まれ。オギャーと生まれた時にはすでに日本全土は濃密な皇国史観教育の空気にびっしり覆われていた。だからその毒ガス以外の新鮮な空気は吸うすべもなく、たっぷり吸ったおかげで戦争末期にはコチコチの軍国少年に出来上がっていた。今思い出しても、国民学校での特に「軍国美談」による修身教育は凄まじかったと思う。今は「坂の上の雲」の話だから日清日露戦争に限定したエピソードを二つだけ挙げてみよう。私たちよりも1世代前の教科書に載っていたのだが、私たちでも知っていたくらい有名な「一太郎やーい」と「水兵の母」である。

まず「一太郎やーい」。丸亀港を小舟で出征していく息子に年老いた母親が岸壁から叫ぶ。「一太郎やあい。うちのことは心配するな。天子様によくご奉公するだよ。」息子はわかったという代りに高々と鉄砲を挙げる。実話を伝え聞いて文部省図書監修官が教科書用に「創作」した物語だが、実はこのあと一太郎（実は梶太郎）は負傷兵として生還するが、手術で両手指を失い、村人から隠れて物置の中でひっそりと暮らし、貧苦のために一家心中まで考えるほどの悲惨な生活を送る。もちろん実話は隠されるが、新聞にすっぱ抜かれてこの物語は教科書から外される。

次に「水兵の母」。軍艦高千穂で女手の手紙を読んで泣いている水兵を見て、通りかかった大尉が叱り飛ばした。女々しいぞ、命が惜しくなったか！水兵は憤然としてその手紙を大尉に差し出す。母から来た手紙の内容は「そなたは豊島沖の海戦にも出ず威海衛攻撃にも武勲を立てないから、母は村人たちに合わせる顔がない。一命を捨てて君恩に報いよ。」大尉は水兵に答える。「悪かった。しかし今の戦争は一人で手柄は立てられない。上官の命令に従って君恩に報いる機会を待て。」かくして読者である小学生たちは、巧妙に練り上げられた大尉（＝文部省）の言葉に、軍国思想を刷り込まれていく。

ところがこの水兵は実は病気がちのため黄海の海戦前に高千穂から下船を命じられ、人目を忍んで指宿村に帰郷し、手柄を立てて村に錦を飾ることもなく、3年後にはとうとう病死してしまった。もちろんこの事実は政府によって闇に葬られた。教科書はこのように不都合な事実は伏せられたまま美談として創作されたストーリーの寄せ集めなのだが、部分的な事実に基いた創作美談だとわかったのはもちろん戦後の研究によってであって、当時私たち少国民は、文部省制作のこのような偽のストーリーをそのまま信じて立派な軍国少年に育てあげられていった。（後で調べてみたら、これらのエピソードは、修身教科書でなく、国語教科書で教えられていた。換言すれば、修身だけでなく国語、歴史、算術、音楽、更に一般流行歌、小説……あらゆるものを通じて隙間なく軍国教育総攻撃を受けていたことに慄然とする。）

翻ってこのNHKドラマを見てみよう。ドラマは細切

れのストーリーの連続である。それぞれのカットは史実に基くふりをしながら、既に述べたようにそれぞれ少しずつ美談に書き換えられ、きれいな映像となって温かいお茶の間に流れる。見終わったところで無防備な多くの視聴者は、刷り込まれている、と意識しないうちに、「大東亜共栄圏」の、いや「世界の盟主としてふさわしい」「誇り高く立派で好戦的な日本人」に出来上がっていく。恐ろしや恐ろしや。

NHK ドラマ「坂の上の雲」第2部について

NHKドラマの第2部が放映されたが、第1部で述べた感想に特につけ加えることはない。危惧すべきことは総て述べたし、第2回ではその予想通りに展開されているからである。

第2部 第1回

歴史学は何のためにある？

第1部への感想（1ページ参照）の冒頭で述べたこの問題への批判として、「当時はその時の事情でそうするより仕方なかったのだ、あなたなら反対したか？」という意見が出て驚いた。

それに対する私の回答は次の通りである。「悪いことは時代を超えて悪いのだ。もちろん仕方なかった事情を子どもたちに教えることも必要。然し、今までの歴史教育は、「仕方なかった」だけをスラスラ教えてきた。「仕方なかった」というその当時の社会全体の流れの中で、「仕方がなくはない」と正論を唱えた少数派が必ずいたはずだ。（この場合でいえば非戦論者たち）もきちんとして、君ならどうすると考えさせるのでなければ、歴史学はただ起こった「大勢の流れ」を、無批判に年代とともに丸暗記するだけの学問（こうなればすでに学問とは言えない）になり下がってしまう。全体の中で個がどうすべきかを考えさせるのでなければ、歴史は過去の年号を暗記する学問(?)になる。

過去から学んで、未来につなげるのが歴史学だ。この、現在の平和憲法を基準にして明治を批判する、という姿勢が共有できなければ、現代の平和憲法下にある日本の公共放送を批判することが総てムダになる。

女性の画き方

硬派を名乗る海軍士官が、軍服を着たまま公道で女性をハグしたり、芝生の上に並んで寝たりということは、当時、出来なかったはずである。戦後60年かかって男女同権が定着し、現在は当然のように感じてしまっているが、当時ではとんでもなかったことを、我々はもう忘れていた。士官といえども、他人の新聞を奪って読むことは明治でもできなかった。

脊髄カリエスの画き方

従姉妹に子規と同病の子がいた。彼女の背中全体が富士山のように出っ張っており、例え痛くなくても、物理的に天井を見て寝ることが出来なかった。まして頂上が触れると激痛が走るに及んでは！ドラマで子規は、殆ど常に正寝姿勢（臨終時でさえ）をとっていた。

子規の退陣

添え者でノンポリの子規が死んで、いよいよ残るは陸軍代表の好古と海軍代表・真之だけと、軍国主義丸出しのドラマになった。

第2部第2回

ウイッテの言動

外交公式席上で、大蔵大臣が自国の内情と私心を述べるか？アレクセイエフが総督になるという内情。

騎士道と武士道

「不幸にして戦うことになったら命をかけて戦い合おう」という意見で一致するのはカッコよく見えるが、政府にとって誠に好都合の体育会的道德の押し売りだ。戦争そのものに対する非戦、反戦は？「戦場にも友情はある」と感激する若者を画く、ハリウッド映画と同じ姿勢だ。

御前会義

明治帝へのカメラ・ワーク。背後～足～最後に顔。敗戦・ヘンな日本語の玉音放送の衝撃。当時の重臣は、もっとひどかった筈の公家言葉を理解した？

真之の位置

海軍の命運の一端を任うことになった～日露戦争は、真之が勝利を導いたと言いながら、後で「命運を担うことになった」とニュアンスがまるで違う表現をしている。

写真の大きさ

当時、引き伸ばしは高価だったので、写真は豆粒大だった。写真の代わりに、絵描きがロケット内に細精密肖像画を描いた時代の筈。

第2部第3回

垂れ幕

報国丸の出港時に、大勢の日本人の眼にさらされながら、既に掲げられることが出来ただろうか？一般の水兵が初めて見るロシア語を、初見で大書できたろうか？アリアズナと耳で聞いたばかりの手書きメモを、彼女に郵送出来ただろうか？

軍艦マーチ

4隻の商船出港時に、遂に海軍軍国主義の象徴歌である軍艦マーチまで遂に出た！軍艦マーチが出る必然性は全くない！軍楽隊兵曹だった芥川也寸志ですら、「アイ・アム・ボーイ」としか英語が書けなかった（也寸志）「インテリ」である。ましてそれ以下の隊員が、きれいな「和音」やマーチのリズムが作れる筈はない。歴史を重んじるなら、もっと同時に即した「下手な演奏」を取り入れるべきである。

広瀬最後のなぞ

日本側：政府の見解もそれに基づく終身教科書も一貫して今日に至るまで、「タンテイニノリウツッテ カヘリカケタトキ チュウサハ タイハウノタマニアタッテリ ッパナセンシヨ トゲマシタ」「今とはボートにうつれる中佐 飛来る弾丸に忽ち失せて」と、ボートに乗り移ってから大砲に直撃され、一片の肉塊しか残らないことになっていた。ドラマでも、ボートに移ってから「少佐がやられました」と水兵に叫ばせている。（広瀬が居ないのに、誰に向かって叫んでいるのか？）

ところが、ロシア側：「福井丸船首付近に、日本将校の遺体発見、正式な葬儀をした」と報じられ、ドラマも両方が放映された。しかし、両者は、誰が見ても互いに矛盾している。ドラマでも紹介しているように、当夜は死者4名。将校は広瀬のみというのが日本の発表である。然らば、ロシア側の「日本将校の遺体」は誰だったのか？まさか存在しない遺体を存在したと報じて、棺に入れ葬ることは出来まい。遺体は、広瀬の筈。

感想文 B

NHKドラマ「坂の上の雲」を見て

(第一部〈第1～5回〉) (男性：68歳)

『「坂の上の雲」を考える会』の中で10月2日(1～2)、10月25日(3～4)、11月22日(5)と観てきて、私が、日本と朝鮮の間の歴史について、格別考えないでいる普通の社会人だったら(「ハン流」ドラマ愛好者だったらまた多少違うかも知れないが)、「面白い。」「感激した(しない)」「あの俳優が上手い(下手)」「金がかかっている、さすがNHK」そんな中から「日本の歴史にこんなことがあったのか」「この人たちのように生きなければ」など考えてしまうのではないだろうか。

そして伊藤博文(加藤剛)が「武力でなく外交」と言ったり、彼を「平和主義者」と説明するナレーションがあれば、現在の日本がそのように外交を進めたり、自衛隊が海外派兵をしないで欲しいと思ったりするかもしれない。

また、中国人(清国人)が日本の軍人に抗議したり、正岡子規が従軍記者として、そういうことに衝撃を受ける場面もあって、当然のことながら、子規を肯定的に評価するのではないだろうか。秋山兄弟という軍人の友人を大切に、批判はなく、付き合っているにしても。

しかし、まずはドラマが進行した時代は実際はどんな時代だったのか？

日本は、1875年の江華島への砲撃、上陸、1884(明17)年の「甲申」役(仙台の陸軍第4連隊もソウルにいて戦闘)、日清戦争(1894～5)等から始まってドラマが終わるといって日露戦争(1904～5)頃まででさえ朝鮮に軍隊を送り、1部で唯一描かれた清国への武力行使と同じこと(あるいはもっと非道い)があったのではないかと。

それがこのドラマには一切というほどなかったと思う。次に、原作者は日露戦争までは少年のような日本であったが、その後悪くなっていったという立場なのだというのが、このドラマの範囲でもその悪くなる源のような、話し合いの外交でなく武力で解決という軍人や閣僚も出てきて、結局は伊藤(平和主義者?)を押し切って戦争の準備、日清、日露戦争へ進んでいる。そうしないと、西欧やロシアが朝鮮を手に入れ、ひいては日本が侵略を受けるといふことらしい。

しかし、そういう連中の考えが明治から日本が敗戦になるまで主流だったのではないかと、ドラマの中のあの連中が、ある時期から旧くなったり、腰抜けであったりと批判されただろうか。平和主義者?の伊藤だって、「伊藤さんの言うとおりにやっていたらたいへんだった」と言わ

ロシア側と食い違う日本側の一世紀以上に及ぶウソをこそ、公共放送NHKは正すべきではないか?このような歴史上の矛盾を発見し正解を見出すことはNHKの得意彼であり、義務ではないか?それでも尚、修身教科書が正しいと言い張るのか?

回想：湖にわざわざ足をひたす必然性ありや? ■

れたらどうか。

それらの人物たちは、1930年代以降中国や他のアジア太平洋地域への侵略、日米戦争をやった指導者たちに尊敬されてきたのではないかと。そして日本国民の大部分にも。

主人公的人物も子規を除いてはそういう大きな流れの中で「成長」していったのではないだろうか。後代のはっきり侵略、帝国主義国家であった日本と区別をつく日本、人物が描かれているとは思えない。

だとすると、現代に生きる製作者がそれをまったく批判的な視点なしに描くのは、社会的責任にそむくことにならないか。憲法9条をもつ国のメディアの責務として。

■

感想文 C

「ドラマ「坂の上の雲」は日本国憲法の三大原則を否定しています” (女性：75歳)

まことに小さな国が世界にはばたいた希望に満ちた時代——これが明治初年から日清・日露に至る「明治の日本」に対する評価です。その基本にあるのは、当時まだ資本主義化していないいわゆる「後進国」を植民地化する列強の一員となるのが一等国であり、植民地をもつのが国の名誉という考え方です。

国の歴史を振り返るとき、いま私たちはどんな地点にたっているのかをふまえなければなりません。となれば、その基本となる拠り所は日本国憲法であり、平和主義・民主主義・基本的人権擁護の三大原則です。「坂の上の雲」は、それに全て背き、そのため、歴史全体からみれば時代を形作る大事な点が無視され、真実がかくされているのです。反憲法の考え方も、思想・言論の自由で認められているという主張もありますが、少なくとも公共放送がそのような思想を宣伝していい筈はありません。

そこで、以下、この基本的な考え方によって、第一部においてはどんな場面が創出されているか、ドラマの展開にそって具体的に見ていきます。

●ドラマ冒頭の時期、日本は江華島事件(1875、M8)を起こし、この時以降朝鮮侵略を始めているが、これに全然ふれていない。その前年の台湾出兵から始まって、明治政府は草創期から周辺諸国に侵略の意図をもち、その流れのなかで引き起こされた日清・日露・朝鮮の日本領土化という事実をかくしている。

●福沢諭吉の「学問のすすめ」の一文をひいて一身独立が一国独立の基礎となると読んだ秋山兄弟が、これを行動原理として立派な人間・立派な偉人になることをめざ

した、としているが、そのような評価でいいのか。

この事に対しては、その基本理念は一国独立が最優先で一身独立は報国の大義のためであったという研究があり、ドラマの見方は再検討すべきではないか。

これに関連していえば、脱亜論（1885、M18）もすでに出版している時期であるが、これは全く無視されている。これにふれずに論吉を肯定的にみるのは公正ではない。

●日清戦争による中国人被害者の姿も出して、日本軍や戦争に対する批判的姿勢も少しみせるが、戦場になったのは朝鮮であることも、朝鮮人が一番の被害者であることも全く無視、朝鮮人の姿は全く出て来ない。

王宮占領も、明成皇后殺害も出さない。東学農民の抵抗とその虐殺、日本侵略と戦った人々の姿も全く無視。日本政府と軍にとって都合の悪いことは全て無視して、画面に出さない。

●明治憲法発布を、民衆はお祭騒ぎで歓迎したことを肯定的に見せている。民衆は憲法の何たるかを知らず、ここに規定された天皇絶対主義が国民を圧迫して軍国主義日本を生み、日本及び周辺諸国を不幸のどん底におとし入れたことを、何に一つ描かない。

●伊藤博文は平和主義者としてもち上げられている。彼が日清・日露の開戦にためらったのは平和主義者だからではなく、彼我の国力を比べて日本敗北を恐れただけである。だからこそ、東学の虐殺も、王宮占領も、皇后暗殺も承認し朝鮮総監として朝鮮植民地化に積極的に動いたのである。侵略の立役者の一人をこのように描くのは許されない。

第二部では軍国主義美化が全編を覆い戦争へ進む過程と、戦争の場面が、全て国を愛する者の行為として美しく描き出され、侵略戦争を肯定しています。以下具体的にみていきます。

●日本の政権指導者達を、一途に国の発展を願う純粋な心の持ち主と描き、対するロシアのそれは腐敗していたと描く。一方的な日本賛歌となっている。彼らの真実の姿を見誤らせることになる。

●戦争への道をとったことを正当化する論立てが基本にある。

①当時世界は帝国主義の時代で、他国を植民地にするか、でなければ自国が植民地になるしかなかった。

②日本はこのままでは「食われてしまう」（＝植民地にされてしまう）から、そうならないために戦わなければならなかった、というものである。

ここで、国が独立を維持するためには、植民地になるか宗主国になるかの二者択一が迫られているというが、

そのどちらでもない第三の道はあり得たのに、それを選ばなかったことを故意に無視している。

“ロシアは南下の欲望が強く、満州を通りこして朝鮮までわがものにしようとしている。このままでは日本がのみこまれる”と解説し、だからロシアとは戦わざるを得ないのだ、との結論を視聴者にひき出させる。

ここで、朝鮮がロシアのものとなったら何故、日本がロシアにのみこまれることになるのか説明はなく、日本は恐怖にさらされている、と見るものに思わせるのである。

しかし、海の向こうの地にロシアが進出してくることが、日本の独立をおびやかすことになるという論理は成り立たない。真実は、日本が朝鮮を、さらに「満州」をわがものにしようとする意図があり、その権益をめぐってロシアと利害が対立しただけの話である。攻め込まれてもいないのに、また攻め込まれる心配もないのに「自衛のために戦う」というのは、侵略する側が使ういつもの理屈である。

●日露協定案で日本がロシアに提示したのは、ロシアは満州を、日本は朝鮮を配下におく案だった。ロシアの侵略を認めるから、日本の侵略も認めてほしい、というもののなのに、これを平和外交を進めるものとして提示している。

●日本の真の意図や真の姿を隠すために、日本は戦争の場でも悪いことはしない、いつも正義の味方であったように描き出す。

例えば北清事変で、日本軍が節度を守っていたのに対し、ロシアは虐殺をほしいままにしたという。歴史事実と反する歴史小説や歴史ドラマは、鑑賞するもの歴史認識を誤らせることになる。

“明治天皇は公家的で、戦争に消極的でありロシアと妥協する道を探ろうとする。そのかげに伊藤博文あり、その影響により明治天皇は平和主義者だったとされている。もしその通りだとすれば、絶対権力をもつ天皇の下で、戦争がやれる筈がない。

●しかしドラマは戦争による国民生活への影響について全く無関心。“軍拡は国民の血税で行い、爪に灯をともして貧しさに耐え軍艦を作るのだ”とは言葉だけであり国民の苦しみを伝えるのではなく、政府・国民が一体となって軍拡に励んだかのように伝わる。

●それは「平民新聞」が戦争反対の論陣を張っていたことを、全く無視していることにつながる。国民が政府と一体になって戦争に進んだように見せるためには、強い反対論があったことはかくさなければならないからである。 ■

感想文 D

原作者があれ程固辞したのにNHKはなぜ映像化したのか。

(男性:67歳)

産経新聞に連載されたころ（1968年から1972年）映画各社から映画化・映像化の申し込みが殺到しましたが原作者（司馬遼太郎氏）は断固としてそれを断ったと

言われています。理由は映像化によって「軍国主義を鼓吹している様に誤解される恐れがある」と映像化によって原作のもっているミリタリズムが更に拡大強調される事を懸念したからです。

しかし生涯映像化を拒否してきた原作者の没後（1996年）間もなく2001年NHKがその映像化の権利を入手しました。なぜそれまでして映像化を狙ってきたのでし

ようか。

プロデューサーの西村与志木氏はこの疑問に CG など映像表現の進化を挙げると共に「世界は新しい構図の中で動き、日本もこれからの方向性を模索しています」と語るのみです。

これでは製作の真意が分かりません。改めて第一部を鑑賞する機会を得ましたが原作者の憂慮がさらに拡大されたのではないかと心配しますがいかがでしょうか。なぜこれほどまでの大金と時間をかけ映像化したのか改めてお答えいただきたい思います。

感想文 E

NHKドラマ「坂の上の雲」を見て (男性: 77 歳)

※「坂の上の雲」は、背景が富国強兵一色の明治時代であり、主人公たちが職業軍人であるため、軍隊や軍人が肯定的に画かれているのが問題だと思う。

「富国強兵・明治」の延長線上にあったのが「昭和の15年戦争と敗戦」だったことは、私にはどうしても否定できない。

幾千万人かとも思われる内外の犠牲者、戦火に費消した無数の資産、大規模な環境破壊、その結果の敗戦だった。これからは文化国家だというのが、当時の合言葉だった。大砲や軍艦をルツボに溶かして電車や汽船に再生させる画が、忘れられない。

このドラマを観る今日の若者たちが、ゲームのような戦争の場面や、キビキビした軍人の言動を見て、カッコよいなどと思わないか、心配でならない。

※「坂の上の雲」について原作者は、映像化を固く断っていたとのことであり、その表明は1986年5月21日放映の「昭和という国家」にも収録されていると聞く。思うに人の遺志は、遺言が法的にも保護されるように、最大限に尊重されるべきものだと思う。わが身を振り返ってみても、私の生前の意向に副うようにと遺族が判断してくれることを望んでいるし、期待に反しないと思えばこそ、後事を託することが出来るのではないか。

それが、憲法にもある「個人の尊重」だと思う。まして文筆家は、その人生観、世界観を作品に投影させているのであって、作品が誤解され曲解されるのでは、死んでも死に切れないだろう。まして固く言い遺したというのでは！遺志の尊重、それも公共放送の立場では尚更、遵守すべきものではないだろうか。

感想文 F

『坂の上の雲・第1部』を見終えて

(女性: 72 歳)

今年は日韓併合百年の年ということで、私にとって見逃すことの出来ない報道、放映が連日のようにあり、ファイルだのダビングだのと、忙しい日が続きました。NHKの「日本と朝鮮半島2000年」、某新聞社の「日本とコリア・百年の明日」などなど。

中でも目に留まったのは、「幻の韓国統監官邸設計図見つける」です。「初代統監・伊藤博文が入る予定で、日

本は朝鮮民族を屈服させるため、見せるためだけの建物を多く建て、近代日本の文明の象徴を誇示しました。そうした統治手法の一端を垣間みることが出来る、とありました。

1905年、初代統監の伊藤博文から9代にわたり、帝国主義者たちは朝鮮の全てを奪ったのです。1910年代は土地を奪い、1920年代はコメを収奪し、1930年代は人、そのものを強奪したのです。

人、そのものとは一つの例として、日本の国会議事堂建設に多くの朝鮮人が労役し(殆どだと言います)、賃金は日本人の半分、事故が起きて死んだものも数十名になるそうです。朝鮮人の辛酸は枚挙に暇ありませんが、それらの不幸は全てこのドラマの時代、つまり日清戦争から始まっているのです。

私事ですが、祖父は125年前の1885年生まれですが、1919年3月1日に朝鮮で起きた独立運動に参加したとして故郷を追われ、日本に来たのです。父は18歳のときに祖父を探して渡日し、その後は家族離散に追い込まれ、遂に帰国することもなく、祖父も、父も、そして私の母も異国の地で亡くなりました。

そういう思いの中、興味深くドラマを見ることになりました。渡辺謙の、如何にも説得力のあるナレーションで滑り出し、キャストの面々の豪華なこと！しかし阿部寛の扮する好古が、「あしが、この世で一番えらいと思うとる人の本じゃ」と『学問のすすめ』を見せるシーンが！あれ？変だぞ！あの福沢？「朝鮮人民のために、その国の滅亡を賀す」などと平気で言っている者などは、私からすれば悪魔、そのものです。

そういえば原作者も、「朝鮮人は、皆、死人に等しい」みたいなことを言った人です。日清戦争のとき、福沢は日本全国で2番目という巨額の軍事献金をし、伊藤や陸奥らに取り入り、アジア蔑視、偏見、マイナスイメージの記事を垂れ流したそうです。150年近くたった今でも、それらは続いている。その罪は深い。

・ドラマのストーリーに戻りますが、正気ではいられず浴びるように酒を飲みながら陣頭指揮をする好古。砲弾にたおれた仲間を目のあたりにして、「自分は軍人には向いておらんのかなとか」と、これまた殺人鬼・東郷平八郎に苦悩を打ち明ける弟の真之。

カリエスに苦しみながらも従軍記者になれたときの子規の喜ぶ前で、「昔は仲ようしてた隣国と、今は戦ってみるのじゃね」と、悲しそうに言う母の姿。いかにも良心的に描写されていますが、こんなものはガス抜き程度のものなのです。

亡国の民として生きざるを得なかった我々の運命は、すでに日清戦争のときから定められていたのです。戦争という最も野蛮な行為の真実、裏側に隠された部分の描写が余りにも無さ過ぎる、このドラマの仕上がり。30%近い視聴率の人気。スマートさばかりが目立つ、このドラマを見た日本の人々。近・現代史を真正面から学んで来なかった(学ばされなかった)日本は、この日清・日露戦争を教訓的に捕らえ

ることが出来るのでしょうか？

人気キャストの素晴らしい演技にオブラートされ、「栄光の明治よ、もう一度」なんて考える人がいるとしたらとても危険なことです。今や世界の趨勢は、戦争をしない方へと大きくうねり出しています。このドラマが、時流に逆行しないことを願うばかりです。(終)